



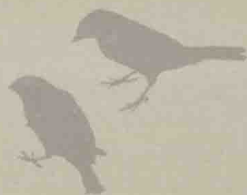
白日傘

岡本優子句集

東京四季出版

白日傘

岡本優子句集



東京四季出版

著者略歴

岡本優子 (おかもと・ゆうこ)

昭和16年 東京生れ

平成14年 「対岸」入会

平成22年 「対岸」新人賞受賞

「対岸」同人

平成24年 俳人協会会員



現住所 〒305-0035 茨城県つくば市松代2-11-2-9-1

俳句四季創刊30周年記念出版・篁シリーズ33

句集 白日傘

しろひがさ

発行 平成二十七年一月十一日

著者 岡本優子 © Y.Okamoto

発行人 松尾正光

発行所 株式会社東京四季出版

〒189 0013 東京都東村山市栄町二―二二二八

電話 〇四二―三九九―二二八〇

振替 〇〇一九〇―三九三八三五

印刷 株式会社シナノ

定価 本体二七〇〇円＋税

ISBN978-4-8129-0796-2

白日傘*目次

序 今瀬剛一

平成十六年まで

17

平成十七年～十八年

49

平成十九年～二十一年

77

平成二十二年～二十三年

121

平成二十四年以降

155

あとがき

196

序

平成十年前後のことだと記憶している。私の担当している新聞の選句欄に一人の女性が投句をしてきた。素材は明るいいし、若さがある。何よりもきらきら光る才能めいたものに私は注目した。そしてこの様な人が本格的に俳句を始めたら伸びるのではないかなどと考えたりしていた。その女性が今回句集『白日傘』を出版した岡本優子その人である。

古い「対岸」を開いてみると平成十四年十二月号に作品が初めて載るから新聞投句から四、五年を経ての入会だったらしい。そこには

をかめの面をかめの心で踊りけり

白薔薇 呆けし母に郡上節

湯上りの柔軟体操 ちちろ鳴く

の三句が載っている。もちろんこれらは修練期の作品であり、幼いことは否めない。したがってもちろん今回の句集には入集されていない。しかしこれらの作品から感じる明るい対象把握、情を被うような知的ひらめきは今も印象新たである。

「対岸」 入会以後の氏は持ち前の力を發揮して活躍を続けていく。とりわけそのひたむきな俳句への姿勢には眼を見張るものがあつた。土浦の初心者例会に出席して勉強をし、やがて東京の中央例会にも出席をするなど次第にその活躍の場を広げていったのである。

雲 一つ なし 一点 の 揚 雲 雀

オリオンを見上げてゐたる一会かな

あの歌の忘れな草を買ひにけり

これらは氏の初期の作品である。その作家の資質というものは初期の作品を見れば分かる。これらの作品はいかにも大きい。そして叙情の膨らみがあ

る。さらに言えばその叙情を押さえる知の力も備わっている。もつと言えばその知をもつて押さえても押さえきれない様な情の存在、それが氏の魅力ではないかと思つた。

また、快い口語調の響きも私を引き付ける。

居ないだらう 次の土曜の鴨一家
露結ぶ あんなに低く 一番星

例えばこうした作品の「居ないだらう」や「あんなに低く」といった口語の使用、これらは内容に実にふさわしい。眼前の鴨を見てその鴨をもう一週間も経てばきつと「居ないだらう」と真実そう思つたのである。一番星を見てその低さを「あんなに低く」と真実呟いたのである。つまりこうした口語の使用の陰には必要に応じた真実の思いがあるように思えてならない。いずれにしてもこうしてデビューした氏は次第にその力を發揮していくのである。

鰯雲の中の一片昼の月
町を消し甲斐が嶺を消し朝の霧

いかにも大きい。そして明るく屈託がない。情景のなかにすつぽりと溶け込んでいような快い作者の姿を感じる。

青天や積むたび揺らぐ蓮の舟
アイロンをすべらすに似て鴨進む
壬生慈姑方丈さんに五人の子
初恋は理科の先生竜の玉

一句目は氏にしては珍しく細かいところを見ている。しかしそれもまた「青天」という明るく広い情景のもとでの描写である。二句目はややうつむき加減の自己描写、しかし「すべらすに似て」という明るい把握はいかにも氏にふさわしいと思う。三句目の人物描写もいかにも温かく、健康的で嫌味がな

い。そして四句目の物語性、自分の過去の回想であろうか、他者のことであろうか、いずれにしても明るい少年、少女の姿を思い浮べる。まさにこの大きき、明るさは氏の作品の根底を成すものであろう。

ところで句集『白日傘』を通読して気がつくことは平成十八年頃を境にしてこの明るさ、大きさに翳りが見え始めることである。

喪ごころに泰山木の咲きにけり

星月夜喜寿のグラスをコツと置く

湧水にいいいよ赤くトマト冷ゆ

朝顔や子規も節も娶らざり

一句目は素材そのものも淋しいが視点がいかにも静かで孤独感に満ちている。二句目にもまた強い孤独感がある。「グラス」を置く「コツ」という音が淋しく響いて「喜寿」という喜びに翳りがさすようにさえ思えるではないか。三句目も何故「冷ゆ」なのか、この頃を境にして、全体的に強い孤独感、

寂寥感の漂う作品が多くなっていく。

実はこの時期に、俳句を作る上でもよき理解者であつたご主人が病に倒れたのである。そして闘病生活が続いていたのである。

したがって氏はその介護のために明け暮れることとなつていた。

きびきびと介護体験茄子の花

点滴の袋さかさま女郎蜘蛛

などはこの時の作品である。前句はいかにも明るく振る舞おうとしている氏の姿が何とも切ない。二句目はまさに不気味、それでもその虚ろな眼は「さかさま」という真実を発見している。そこが悲しい。句集『白日傘』の題名となつた

白日傘誰にも会ひませんやうに

という作品もこの時期に作られたものである。誰にでも人に会いたくない時がある。一人で居たい時がある。ましてご主人が病み、そしてそのことで頭がいつぱいになっている時など人と会うのは煩わしい、その心境を作者は祈るように「誰にも会ひませんやうに」というのである。ここからは孤独の極み、淋しきの最たるものを私は感じる。ただうつむき加減に歩く作者の姿が思えて、日傘の白さが眼に痛いだけである。

実を言うところの句集名を決定するにあたって私は幾つかの言葉を示した。その時に氏は迷わずに「白日傘」を選んだのである。それほどこの作品は氏の心の奥深く響いている作品なのであろう。私はいま「白日傘」を句集名に選んだ氏に拍手を送りたい。ここには作者の思いが全て含まれているように思えるからである。一見淡々と祈っているように思えるがその祈りは無限に大きい。そして何よりも氏はこの作品を読むたびに当時の心境を思うのではないか、そして何よりも病み亡くなられたご主人のことを思い出すのではないか。この作品の生まれてまもなく、介護の甲斐もなくご主人は他界された。

中座してそれつきりなり麦藁帽

何もかも昨日と同じ鰯雲

浮寝鳥歌を忘れてしまひけり

ご主人が逝去された時の作品である。知的な氏は決して慟哭の姿を見せはしない。いやむしろ悲しみを被い隠そうとするのである。しかしかに隠しても隠しおおせるものではない。その強い悲しみは作品の背景となつて読む者の心を打つのである。あたかも中座した様な死、ちよつと失礼とでも言つて立ち去つた様な死、この表現の背後にどれほど大きな思いがあるか、麦藁帽子が悲しく潤んで見えるばかりである。呆然とした氏は外へ出てみる。そこには昨日と同じ鰯雲がある。氏の生涯の中の一日を隔てた昨日と今日、しばし茫然として、空虚な心で浮寝鳥のごとくたたずむのである。

残されて後を大事に七日粥

風船かづら二人の月日風のやう

これからも筑波は二峰今日の月
会心の鰯大根や夫遠し

これらも追悼の作品と考えていい。一句目は自分に言い聞かせているのである。「後を大事に」という言葉が心に響く。二句目は静かに在りし日のことを回想しているのである。「二人の月日」はもちろんご主人と過ごした過ぎ去った日々のことである。そして三句目の筑波山を見ての正直な思い、今は何を見ても亡き人へ通じる思いが悲しい。

氏は強いてその悲しみから眼を離そうとする。そして子供さんへ、お孫さんへとその眼は移っていく。

行く先に子の国のあり鰯雲
胸はつてきれいな返事初つばめ

氏には三人のご子息があると聞く。皆家を離れているらしい。一人はオー

ストラリア勤務と聞くから、頻繁に会うこともできないのであろう。そうしたいのが前句からは感じられる。後句はおそらくはお孫さんを詠んだものであろう。そのすすくと育つ姿を見て目を細めている作者を思い読者はほつとするのである。

あるいは次の様な近くの情景を詠んだ作品もある。

揚ひばり真つ直ぐ伸びる科学都市
秋蝶を優しく隠す草の色

前句は氏の住む筑波学園都市の様子を詠んだもの、「真つ直ぐ伸びる」という表現がいかににもその場にふさわしい。後句は「秋蝶」への温かい目、静かに対象を捉える眼は健在である。

また物語や劇の様な世界に心を遊ばせる次のような作品もある。

ハンカチや「をかし」は時にいとかなし

猫の恋奴は必ずふり返る

前句の観念の具象化は見事だ。古語辞典を引くまでもなく「をかし」は不思議な言葉だ。意味を考えても「面白い」「風情がある」「立派である」……、数限りなくある。その不思議な言葉を「ハンカチ」で具象化している。後句の「猫」好きについても言いたかったが紙幅がつきてしまった。そのことはこの句集の至る所に見かける挿し絵によっても推測してもらおう。

このように『白日傘』を読みすすめてきて私はこの句集は亡きご主人への鎮魂の句集であることを確信する。そのことは例えば巻末近くの

蕨餅おかげ様です 元気です

いきいきと待てど暮らせど余り苗

どの子にも見上ぐる未来今年竹

定位置に居る仕合せの室の花

のような作品を見てもわかる。一句目はご主人に語りかけているのである。「元氣ですよ」と言っているのである。二句目にはその語りかけに多少の愚痴が加わるように思う。そして三句目では子供さん、お孫さんの現況を報告しているのである。どの子もみな未来に希望がもてますよ、今年竹のようにすくすく元氣に育っているから安心してくださいと叫んでいるのである。そして四句目の控えめな自己の現況の報告、私は「室の花」のように大切にされていきますから安心してください……、照れ性のあるところのある作者は俳句という形を通してその様に言っているのだと思う。おそらく今後も氏は生ある限りこうしたご主人への手紙は書き続けるのではないか、その様に思えてならない。

句集『白日傘』の温かく迎え入れられることを願い、今後の発展を心より祈りつつ序文の筆を擱く。

平成二十六年十一月

今瀬剛一

白日傘*目次

序 今瀬剛一

平成十六年まで

平成十七年～十八年

平成十九年～二十一年

平成二十二年～二十三年

平成二十四年以降

あとがき

1

17

49

77

121

155

196